子ども健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Neurodevelopmental Outcomes Among Offspring Exposed to Corticosteroid and B2-Adrenergic Agonists In Utero

和文タイトル：

妊娠中のぜん息薬使用と 3 歳時点の子どもの発達の関連

ユニットセンター（UC）等名：鳥取ユニットセンター

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：JAMA Network Open

年： 2023　　DOI：10.1001/jamanetworkopen.2023.39347.

筆頭著者名：長田　アビル

所属 UC 名：鳥取ユニットセンター

目的：

妊娠中の薬剤使用は、多くの薬剤添付文書ではリスクがベネフィットを上回った時のみ使用可能と書かれているだけで、実際に胎児や子どもの発達に対して影響があるのかは不明である。そこで、本研究では妊娠中のぜん息薬使用が子どもの発達に影響を与えるかどうかを調査した。

方法：

エコチル調査に参加する母子 91,460 組を対象とした。妊娠中のぜん息薬（コルチコステロイド、β2 アドレナリン受容体作動薬）の使用については、妊娠初期（12 週以内）と妊娠中期以降（12 週より後）について把握した。子どもの発達は、ASQ-3 質問票を用いて 5 つの領域（コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人と社会）について評価を行った。妊娠中のぜん息薬の使用と子どもの発達の関連について、ロジスティック回帰分析を行った。さらに、一般化推定方程式（GEE）を用いた解析も行った。

結果：

妊娠初期、妊娠中期・後期、その両方でコルチコステロイドの使用があったのは 401 名（0.4%）、935 名（1.0%）、568 名（0.6%）であった。β2 アドレナリン受容体作動薬の使用は、それぞれ 170 名（0.2%）、394 名（0.4%）、184 名（0.2%）であった。いずれのぜん息薬の使用も、子どもの発達との関連は見られなかった。

考察（研究の限界を含める）：

本研究では、妊娠中のぜん息薬の使用時期とその後の子どもの発達との間には縦断的な関連は認められなかった。この結果は、妊娠中のぜん息コントロールには効果的な治療が不可欠であるため、従来のガイドラインで推奨されているぜん息薬の処方は妊娠中であっても継続すべきであることを示唆している。研究の限界点としては、質問票調査によるため、本研究では喘息薬の使用量まで調査することができなかったことがあげられる。また、エコチル調査で得られたデータ以外の共変量については不明である。さらに、思い出しバイアスが存在する可能性がある。

結論：

妊娠中のぜん息薬使用と、子どもの 3 歳時点の発達との関連は見られなかった。